さらに欠落系は、「AC[2]系」と「魅力確認系」の二つのサブカテゴリーが存在する。以下詳述しよう。

3−1 欠落系

内面希求型である欠落系とは、簡潔に述べるならば、援助交際を行う女性が当の援助交際を行った帰結として、彼女自身の内面（mentality）に大きく作用する何かを得るという援助交際女性の類型である。ある女性が援助交際を行った結果、金品や性的快楽よりも彼女自身の内面への影響、あるいは内面に大きく作用するものがあったというケースである。ここで言う内面への影響とは、関係論的自己と性的アイデンティティへの影響の二つを指している。このタイプは、39人のうち18人、半分程度存在している。

次に援助交際において、獲得可能な女性の関係論的自己における変化と性的アイデンティティの変化について、それぞれに対応するタイプを記述する。本稿では、社会関係の中で獲得される自己イメージである関係論的自己に対する希求が顕著なケースをAC系と名付け、性的アイデンティティに対する希求が顕著なケースを魅力確認系と名付けておく。

AC系の女性は家族関係や対人関係における心の傷であるトラウマ（心的外傷）を抱えている。このサブカテゴリーには10人の女性が分類される。筆者の取材した事例では、家族関係では義理の父親によるレイプ、両親の離婚、実の父や母による身体的暴力、また対人関係では集団レイプや、イジメ、浮気や三角関係による恋人の裏切り、対人関係の不得意といったものがあげられる。彼女たちの抱えるトラウマと援助交際は一対一に原因−結果として即結びつくと断言できるものではない。しかし援助交際女性の内面を注意深く探っていくと、寂しさや孤独といった感情、他者から愛されたい、必要とされたいという欲求が顕れてくる。その裏には、幼少期から思春期、そして現在に至るまでに彼女たちが抱えてきたトラウマが見えてくる。この種のトラウマを抱える女性が全員援助交際に走るというわけではもちろんない。援助交際のきっかけには、街頭でティッシュをもらった時にたまたま暇だったのでテレクラに電話した、あるいは偶然に仲のいい友達がやっていたことで援助交際をやってみたという、かなり偶発的な要因が大きい。

こうして援助交際を始めることで、中には癒されるという女性もいる。24歳のリエは、19歳の時に集団レイプにあっており、そのことが原因で数年前に一時的に援助交際をやっていたと言う。

＜データ1＞
筆者：援助交際やった後は、後悔するの？
リエ：後悔っていうか、もうそれも通りこして、なんて言うんだろう、なんかキタナイ世界を見たな（っていう感じ）、私もけがれていく。
筆者：自分がけがれていくっていうのは、ある意味気持ちがいいの？
リエ：うーん、気持ちいいと言うより、なんかねぇ、なんて言うんだろう、傷を傷で癒す。
（1998.8.21 収録）

リエのケースでは、見知らぬ男性と金銭を媒介にした性行為を行うことが単に自らを傷つけているというだけではない。ここでは、「傷を傷で癒す」という言葉に見ることができるように、援助交際において自らを傷つける性行為を行うことが、自らが抱えるトラウマを一時的にせよ、解消できるという逆説が生じている。

もう一つ同様の事例を見てみよう。ミユキは、取材時に私立の女子高三年生で国立大学の受験を控えているが、援助交際を中学二年生の時から続けている。ミユキもまた、中学一年生の時に集団レイプに遭っており、そのことが原因で援助交際を続けていると言う。

＜データ2＞
ミユキ：（学校では普通の女の子として振る舞っているが）ほんとは、私はけがれている

2）ACとはもともと、合衆国におけるアルコール依存症の臨床現場から生まれた言葉で、「アルコール依存症の問題を抱えた家族の中で、成長した大人」（Adult Children of Alcoholics）を意味している。一般的には、家族内トラウマの後遺症（PTSD：心的外傷後ストレス障害）に悩む者のことである。